

備北開拓

— 正月キャンプ以降

今井真治

大阪で、この正月にキャンプを持ちました。春以降の具体的な計画について、話し合ったわけですが、その報告書を読んだ人たちのうち、三、四人の人たちから、今までの備北とは、進み方がちがってきたのではないかと、つまり路線あるいは方向の変更があったのではないかという指摘とともに、批判をばくは耳にしました。

よく自身は、どう考えているのかということについて、説明を加えながら、まとめてみようと思います。

去年の夏のキャンプの反省から、もっとバッチリした方向をみつけたらというところから、学習キャンプが提起され、

この正月に三日間集まりをもちました。その時、今までのほくには、共同体運動をやっているんだという視点がないと批判をうけ、今後は共同体運動としての方向を明確にする意味から、各地に散らばっている人たちを含めて、備北共同体運動を展開していく百人委員会というものを設けることになりました。

ほくは、備北に限らず、各地の人たちと刺激を交換するために、情報センターのようなものがほしいと思っていたので、百人委構想に賛成しました。

また、その集まりで、具体的な活動も検討され、いろいろ壮大な夢が語られました。

たしかに一般論としていえば、今の状況を直視しているように感じられたのですが、ただ気にかかったのは、「……しなければならぬ」という、上からのものの見方でした。ほくににとっては、そうした「……しなければならぬ」というような問題の立て方は、なじめそうもありません。

百人委の構想そのものは、壮大だと思うのですが、その中身、実体には、いささか失望さえ覚えはじめています。

たとえば、最近の備北日よりヤパンフ類を

みても、自分たちだけが「正しい」運動を、

今までになかった独創性をもってやっているというふうな思いあがり、ほくには感じられるのです。

ほくは、備北をあくまで、一つの仮説でしかないと考えているし、備北よりもっと大胆な独創性をもった運動が、ほかにもあったし、今もあると思っています。もし備北だけが、「突出」している運動だとしたら、あまりにわびしすぎる。

つい最近、備北のことで動いている人たちの集まりがありました。

その時、今まで備北の動きに暖かい好意をよせてくださっていた人から、最近の備北の動きに対して批判がよせられたことを、一つの問題提起として公表したのですが、わが備北の連中からは、その人からの毎月のカンパが、打ちきられるかどうかという面での反応が返ってきて、いささか悲しくなっていました。

互いに乏しいサイフの中から、多額のカンパを寄せていく人たちの気持も考えないで、自分たち備北のサイフが大きくふればよいというような、「運動」という名の思いあがりには、まったく怒りがこみあげて

くるのです。

運動があつて、人間が軽視されるような動きの中から、はたしてどんなものが生まれてくるでしょうか。どうも、そのあたりに、ほくの生き方からは、異和感を感じてなりません。

愚痴ばかり、並べたててしまいました。本当にむずかしいものだと思います。けれども、いやむしろ、むずかしいものであるからこそ、ぼくの一生を通して、その実現への、ただの一步でも築いていきたいと思うのです。腰をすえて、築いていこうという新たなフアイトさえ感じています。

72・2・16 備北開拓 今井真治



横浜港を出発する前田英雄さん

ブラジルの「コミュニン」づくりへ出発

—— 山岸会の前田英雄さん一家

山岸会の前田英雄さん一家四人が、ブラジルでの拠点づくりの先遣隊として、二月二八日午後、「ぶらじる丸」で横浜港を出発した。風は強いが晴れた空が青い海に映えた日で、前田さんたちは淡々とした表情でこれからの長い旅に向かった。

本誌でも何度か紹介したように、今回の試みはブラジルに住む何人かの日本人の呼びかけに応じて山岸会の人たちがブラジルでの、「ユートピア・コミュニン」づくりにより出したものである。前田英雄さんはこの計画にはじめからたずさわり、今回も第一陣として現地に乗りこみ、これからの運動の展開について現地の人たちとともに検討するという。彼の養鶏家としてのすぐれた技術と山岸会の中での長い運動体験が、ブラジルで充分に生かされることを祈りたいものである。彼は、日本の共同話し合いの会の常連でもあったので、日本の共同運動とブラジルのそれとの結び目になってくれることが期待される。

現地には農場づくりの候補地が何カ所かあ

り、そのうちのどれから手をつけることになるだろうが、具体的な構想は前田さんが現地へついでから練られるそうである。今のところ考えられているのは、ヤマギシズム生活実顕地の造成や特別講習研鑽会や研鑽学校の開催、ブラジルと日本の間の人事交流などであるが、実際にどんな風に発展してゆくか、今から楽しみである。

山岸会の海外との結びつきは、今まで韓国との間で最も密接であり、韓国でヤマギシズムにもとづいた農場がつくられたりして、人事交流も活発である。だが、韓国はすぐ隣りで交流も容易だが、ブラジルとなると地球の反対側の最も遠い国である。こうした遠国にまで飛火して活躍することは、山岸会のスローガンである「国境を越えてゆくヤマギシズム」ということにもふさわしいであろう。国境を越えて人々が共存しあう姿をつくりだしたいものである。

出発を前にして、前田さんは、「私たちの試みに、日本の若者たちがどんどん加わって欲しい」と語っていた。

(問合わせは、三重県阿山郡伊賀町川東 山岸会本部、または、電話三六八―四六五〇ヤマギシズム東京案内所まで。)

読者会だより・仙台

大原輝一郎

実験ということを知りはじめたころ、よくやった遊びで今でも鮮明に記憶しているものにこういふのがある。障子のレールのうえにビー玉をびったりくっつけて一並にならべる。その外から別のもうひとつのビー玉をはじくと、列の反対側のビー玉がひとつだけとびだしビー玉の行列自体は、以前のままの行列として残る。ふたつはじくとふたつとびだす。三つ……同じ事がくりかえされる。たとえば今、とびだしたビー玉一個一個に人格を与えれば、それぞれは自分の行為をどう思うだろうか。

我々の「集団」というのは、「月刊キブツ」を読んだことがあるというだけで集合しはじめた、不定形な拡散した「集団」である。一人一人が、日常生活を否定するなにかを内に持ちながらも、それをそれと知らずにただ体を寄せあうだけの集団は、出発点からあいまいさを前提とせざるを得ない。

会ができて半年。まだなにもはじまらない。実に、集まること自体が唯一の活動なのである。

どうしても飛びこえることができな絶壁のふちに立って声のかぎり叫びたてても、むこうの峰からはなんの答もない。自分の声すら返ってこない無気味な状態のなかで、出口をみいだすことができないまま、いら立ちと苦痛が自家中毒の症状をひきおこす。だがそれでもなお、集団は細々と生き続け内部にそれなりの孤立した世界を浮きだし、疎外された日常生活そのものを反映する。〈なぜ?〉この問いは常にギリギリの地点でくりかえされなければならぬ。

我々の世界は、まえに述べたビー玉のふたつの行列に、つまりインパクトをとなりに伝達する行列とそれによつてはじきだされた行列に似ているといえ、単純化しすぎているであろうか。



ここでさらに問いが起こる。ひとつの完成された現代社会から、変革の意志の対象化としての集団に、自分を追いやるインパクトはなにか。そしてその集団の内容はどんなものであるべきか。

これまでの問題意識では常に後者の問いしか問われなかった。集団の形態のみが自立し、その中の個の出発点は現存在そのものでしかなく、あまりに主観的、観念的すぎないかという事である。前者の問いはただ感性的、直感的なままでとじこめられ、そのまま後者の問いの前提となる。前者の問いを問い続ける事自体が、問いに答えていく過程であろうし、自分自身の変革の必然性を自覚することである。大げさに言えば、歴史の中に自分を発見しようとする事でもなるのだろうか。

ここまで問い続けてもまだピンとこないが、我々の「集団」の負の要素をハッキリ知ることが、それを正の要素に転換できるとするとこの集団は発展の可能性もあるであろう。やはり最後まであいまいなのである。

「月刊キブツ」仙台読者会への連絡は、〒980 仙台三百人町一五七 松泉堂アパートA 大原輝一郎 気付

協会日誌

2月1日 月刊キブツ二月号の発送。九士、外務省旅券課へ交渉に。

2月6日 二月号に「こぼれ落ちるのもいいもんだ」を書いた吉田ミツオさんを中心とする「ぐるーぶ・じゃん」の劇をみる。とてもなつかしい雰囲気をもった人たちで、楽しかった。

2月8日 物置きに使っていた事務所のフロ場を整備して、フロに入れるようにする。希望者はどうぞ。

2月9日 最近キブツから日本へ帰ってきた下山弘至、内藤勉の両氏くる。下山くんは全国に散っているキブツ体験者と呼ばかけるんだといって、セッセと名簿を作成する。

2月10日 大雪。朝、雪をけつて事務所へ向かう。ここのところ九士、直彦が泊りこみで仕

事をしてる

2月11日 今度キブツへ行くことになっている満江さんが、山岸会の特講うけてやってくる。彼女は輝いた表情で、自分が大きく変わったような気がするとうれしそうに語る。特講の真価が発揮されたようだ。

2月13日 直彦、哲は宇都宮の先にある河内共同養鶏実蹟農場へゆく。この農場は全協連のメンバーでもあり、約八千羽のプロイラー種鶏の飼育をしている。その木村さんが色々説明してくる。彼らは今、生産者と消費者とを直結させた、良質の食卵の流通ルートをつくり出したところ。共同体のようなものを志向している若者たちについて、木村さんは、「彼らは、すでにあるものの寄生虫になるのではなく、何かの仕事や責任を積極的に引きうけてゆくこと

よけるのだ」と力説していた。

2月17日 長谷川進氏のとこへ原稿執筆を依頼にゆく。氏が以前に翻訳したM・ブーバー著「もう一つの社会主義」(理想社)が、最近改訂され、名も「ユートピアの途」と変わって出版された。

2月18日 直彦が過疎地帯の調査をかねてしばらく郷里の長野に帰ることになる。このころから追いつめられた連合赤軍の動きが、新聞紙上ににぎわすようになる。

CIという自然食の運動にかかわっている谷克彦さんから「塩」の問題を聞く。

2月19日 久しぶりに共同性発見集団の会合。この春から何人かが就職し、一人がスエーデンへ、一人がイスラエルへ行く。が、この集団の人間関係は続いてゆきそう。

2月20日 フィリップピンでコミュニティをつくるというM・デアズ君がくる。彼はキブツに

もいたことがあり、今度日本共同体から学びたいという。2月21日 ニクソンの訪中劇がはじまる。歴史の一つのポイントになるだろうが、一人の庶民の立場から見つめてゆきたい。なぜ北爆が続いているのか。

2月25日 東山産業の藤井夫妻くる。

2月26日 大竹作摩氏くる。アメリカ人の四人の家族がきて二人の子供に共同体の生活を体験させたいという。

2月27日 ワークキャンプ団体のSCCの総会へ行ってみる。金峰開拓での活動が非常に興味深い。

2月28日 山岸会の前田英雄さん一家が、ブラジルでの新たな活動の場をつくり出すために横浜港を出発する。

2月29日 草刈善造、水津彦雄、中村悦子の三氏くる。草刈さん、「阿寒学園」の構想に張り切っている。

制作部メモ

▼田舎の道を歩いていたら犬に
ほえられた。近頃の犬は車やオ
ートバイにはほえず、最も無害
な歩行者に面当てるらしい。
そう、歩くことは狩猟やスポー
ツに委ねられ、もはや日常の一
部ではないらしい。歩いた分の
時間はテレビを見る？ 妙なも
ので、車の通る道を独りテクテ
ク歩くのは気恥かしくなってい
る。

「いつかは島を捨てた若者ら
が帰り、島は栄えるであろう」
との霊のおつげ(NHKテレビ)。
島の霊の神託は、経済の法則に
は勝てないのか？ ヒコ
▼世の中の動きがあわただしい。
そのあわただしさは、ゆったり
と生きていたいばかりの中へも入
りこんでくる。どうしても他人
事にしておけない。たとえば、
連合赤軍の一連の動きなど、マ

スコミの多くがそうであるよう
に単なる「異常事」として、な
かば興味本位に片づけてしま
うわけにはゆかない。それは、こ
の混乱した息苦しい世の中に生
きているほくら一人一人の内面
や人と人との関係のあり方を、
深く反省させずにはおかない。
ほくら誰しもがもっている他人
を傷つけたくないという共存の
感覚をテコにしながら権力の横
暴に対してゆくような生き方が
ないものか。片方で中国と笑顔
で握手しつつ北爆を続行する米
国の偽瞞や、閣議のようになり
器を運びこむこの国の軍人たち
をみる時、ぼくはある戦慄を感
じつつ、自分の生き方を再点検
せざるをえない。 テツ

▼ジュリアン・ソレルやジャッ
ク・チポールは、社会の虚偽や戦
争という不正に対する闘いのな
かで生き、そしてまさに不条理
としか表現しようのない死を死
んでいった。ジュリアンは、貧

しい下層階級の木挽き商人の息
子としてその貧しさと差別と偏
見への反抗から、ジャックは、
ブルジョア階級の息子として、
ブルジョア社会の偽瞞と非人間
的抑圧に対する反抗から、彼ら
の社会へ挑戦した。だが彼らの
闘いは、彼らの目標からははる
かに遠い地点で、あまりにも早
い終焉をむかえなければならな
かった。深い憎しみと激しい愛

のなかで生きた彼らのあまりに
も短い敗北的な一生は、だがほ
くらの平凡な日常をこえて、輝
きを失うことがない。彼らの不
当な死は、社会に対して銃口を
むけた人間のすべてが受けなけ
ればならない宿命的な運命とい
えるのだろうか。しかし、彼らの
存在だけがぼくに深く語りかけ
てくるのはなぜだろうか。 允士

■入会して、定期購読しよう

共同体に、コミュニケーションに、キブツに関心のあ
る方、もっと生命力にあふれた社会を作り出
たいと思っている方、この雑誌を定期的に
読みたいと思いませんか。1年間の会費は、入会金
とも2000円です。「月刊キブツ」は、現金書
留か、振替(東京 24403)で、氏名、住所、
生年月日、職業を書きそえて、直接当協会
へお送り下さい。

■月刊キブツ取扱書店

東京—新宿紀伊国屋、神田東京堂、模索舎、
ウニタ書店、国分寺アヴァン書房 大阪—會
根崎書店、ウニタ書店 京都—京都書院 札
幌—富貴堂、北大生協、アテネ駅前店 仙台
—八重州書房 盛岡—第一書房 福岡—九大
生協 松本—遠兵ブックセンター

月刊キブツ 1972年4月(通巻97号)
頒価 150円 東京都渋谷区代々木4-5-14
 参宮橋ハイイツ10号室 〒151
TEL 03-370-2813 振替・東京 24403

■次の書籍は、本協会にて販売取扱いをしています。

- 生きがい 手塚信吉著 日本協同体協会/頒価・七〇〇円/送料・一四〇円
- 日本の共同体 手塚信吉・草刈善造著 日本協同体協会/頒価二〇〇円/送料・三五円
- もう一つの社会キブツ H・D・ドラブキン著/草刈善造訳 大成出版/定価・一〇〇〇円/送料・一四〇円
- キブツ—その社会学的分析 山根常男著 誠信書房/定価・三八〇〇円
- キブツのこともたち 篠原睦治著 誠信書房/定価・一二〇〇円/送料・一四〇円
- キブツ・戦争・オレンジ 西本とみ著 芙蓉書房/定価・五八〇円/送料・一一〇円
- キブツの記録 山根常男著 誠信書房/定価・七五〇円/送料・一一〇円
- 日本のユートピア 水津彦雄著 太平出版社/定価・八五〇円/送料・一四〇円
- ユダヤの挑戦 S・ベレス著/古崎博訳 読売新聞社/定価・八五〇円/送料・一四〇円
- 爆破 野本三吉著 青林堂/定価・六八〇円/送料・一四〇円

Z革命集団山岸会

ルック社/定価・四八〇円/送料・一一〇円 山岸会文化科編

ポロと水(季刊) ヤマギシズム出版社/定価・二五〇円/送料・五〇円 ヤマギシズム運動誌

土に折る

真の農村社/定価・三五〇円/送料・五〇円 兎玉亀太郎著

紫陽花邑 現代宗教研究所編

フェイリス出版/定価・三二〇円/送料・五〇円

アグリランダス H・ハルペリン著/飛田徳三訳

キブツとは何か? 大成出版/定価・一七〇〇円/送料・一四〇円

若きテイクバ A・シャピロ著/手塚太郎訳

日本協同体協会/頒価・五〇〇円/送料・二〇〇円

ラマトヨハナンの会/頒価・二〇〇円/送料・五〇円

■この他に本協会取扱いのミニコミ誌としては、自由連合(自由
連合社)定価三〇〇円、コミュニケーション往来(コミュニケーション好き者会)定価三
〇〇円、告発 定価二〇〇円、うちゅうろん(うちゅうろん社)、北
海通信(ヤマギシズム北海道試験場)等があります。